

○作品タイトル

月明かりのひととき

○元にした作品のタイトル（あれば）

なし

○著者名

相川千尋

○140文字以内のあらすじ

気弱な主人公の美琴は、同棲している男性である優との別れの当日も、自分のドジで落ち込んでしまう。

その後二人の日々を振り返るが、やがて別れの時間が訪れる。落ち込む美琴だが、部屋に残された優のスマホを見て立ち直る。

数年後、社会人として自立した美琴は、優との日々を思い出して前を向く。

○特記事項（概要、アピールポイント等があれば）

なし

○本編の文字数

4792文字

【人物一覧表】

高橋 美琴 (22) 大学3年生

芹沢 優 (24) 美琴と同棲する男

美琴の上司

【本編】

○美琴の家・リビング

部屋には椅子が2脚とテーブルが1台

部屋中に引越しの段ボールが積みあがっている

椅子に腰かけ、青いカバーのスマホを操作する優（24）

テーブルに置かれた、ピンクのカバーのスマホが鳴る

着信画面には『ABC引越センター』の文字

優「美琴、電話」

と、扉の向こうに話しかけるが、反応がなく舌打ちする優

優「美琴！電話！！」

足音とともに、手にノートを持った美琴（22）が、スマホを探しながら

リビングに入ってくる

美琴「ご、ごめんなさい！えーと、スマホは……」

優、テーブルのスマホを指さして

優「んん」

美琴「あ、ありがとうございます！」

美琴、手に持ったノートをテーブルに置き、スマホを取る

美琴「もしもし、はい高橋です。はい、今日引越しを依頼してる。あ、そんな
んですね。え、2時間……？いえいえ。私は全然大丈夫です！」

優、電話で話す美琴を見ながら、苛々して指で机を叩く

美琴「それより気を付けて来てくださいね！急いで事故とか起こしちゃうと大
変なので！また後で宜しくお願いします！」

美琴、笑顔で電話を切る

優「なんだって？」

美琴「えっと、前の引越しが長引いて、2時間ぐらい遅れるって」

優「は？」

美琴「ひっ、何ですか……？」

優「そんなに待たされるのに、あんな丁寧に返事してたのかよ」

美琴「う、仕方ないじゃないですか。業者の人も謝ってましたし」

優、ため息をついて

優「こっちは金払ってんだから、クレームの1つでもいれろよ。ったく、最後ま
でこんなこと言わせやがって」

美琴、目を伏せる

美琴「最後とか、言わないで下さいよ……」

優、美琴から顔を逸らす

優「……」

美琴「それに、これから手伝ってくれる人達に、クレーム入れるとか良くないと
思います……」

美琴・優「……」

微妙な沈黙の後、

美琴「あれ、私ノートどこ置きましたっけ」

美琴、自分の手が何も持っていないことに気付く

美琴「ありました！」

テーブルの端に置かれたノートを見つけ、美琴が手を伸ばす。

美琴「痛っ！！」

美琴、拍子に足の指をテーブルの脚にぶつける

美琴「いったぁ……」

優「何してんだよ」

美琴「机にぶつけたんですよお……いたた……」

美琴、しばらく呻きながら足を抑えた後、大きなため息をつく

優「いつまでうずくまってんだ」

美琴「自分のドジさに落ち込んでるんですよ……引越しの日ぐらいしっかり
したかったのに……」

優「うっとおしい。さっさと立ち直れ」

美琴「うう……どうせ私なんて……」

うずくまり続ける美琴

優「早く立てって」

優、ため息をついて、

優「お前がドジなのは今更なんだから、早く立ち直った方が良いだろ」

美琴、驚いて立ちあがる

美琴「……もしかして、励ましてくれています？」

優「は？」

美琴「ごめんなさい……調子に乗りました……」

優、舌打ちして

優「ったく。で、引越しの準備は終わってんのか？」

美琴「は、はい。業者さんに荷物を渡したら出発するだけです」

優「へえ、そのしけた面も見納めだと思おうと清々するよ」

美琴「そんな言い方……」

美琴、ノートを手に持ったまま、椅子に座る

美琴「あの……」

優「あ？」

美琴「これ、一緒に読んでくれませんか？」

優「何だよそれ」

美琴「日記です。ここに住んでから、毎日書いてました。……何かあった時の証
拠になるかもって」

優、にやにや笑いながら

優「へえ。その大事な証拠を俺の前で読んでいいのか？」

美琴「今日で、最後なので」

優の笑顔が固まり、真顔になる

優「勝手にしろ」

美琴、日記を読み始める

美琴「11月30日、明日はこの家に住んで1年記念日。…そして、優とお別れ
する日」

優「優さん、な。ってか、昨日の分から読むのかよ。こういうのって、古いやつ
から読むだろ」

美琴「良いじゃないですか。自分の日記ぐらい好きに読ませて下さいよ……」

ため息をつく優を横目に、美琴が再び日記を読み進める

○（回想）美琴の家・リビング・夜

テーブルの上に、晩御飯を並べる美琴

椅子に座って自分のスマホを弄る優

美琴M「今日はローストビーフを作った。別れる前の最後の晩御飯なのに、優は口をつけてくれなかった」

テーブルにご飯を並べ終え、椅子に座る美琴

美琴「ほら、食べましょ！いただきます。」

優「何で俺の分も食器があんだよ」

美琴「最後ぐらい一緒に食べましょよよ」

優、ため息をついて

優「何回も言ってるんだろ。『飯は食わない。1人で作って1人で食え』」

美琴「そんなあ……最後の晩御飯ぐらいは違うかなって思ったんですけど」

優「そんな訳ないだろ」

優、テーブルを見て笑いながら

優「それにしてもローストビーフって、張り切り過ぎだろ」

美琴「これでも頑張ったんですよ！ちょっとぐらい褒めてくれても……」

泣きそうになりながら、ローストビーフを箸で掴み、口に運ぶ美琴

美琴「え、めちゃくちゃ美味しいです！」

美琴、びっくりして顔を上げる

優「はは、急に表情変わり過ぎ」

美琴「だって、本当に美味しいんですもん！あ、そうだ…！」

スマホを取り出して写真を撮る美琴

ため息をつきつつ、微笑みながら美琴を眺める優

(回想終わり)

美琴、二人分の食器とローストビーフの写真を日記帳から取り出し、
テーブルに置く

優「なんだよそれ」

美琴「料理が上手にできた時は記念に写真も挟んでるんですよ」

優「へえ…相変わらず几帳面なことだ」

美琴、優の嫌味を無視して日記を再び読み始める

美琴「8月10日。優と暮らして約8カ月が経った」

○(回想) 美琴の家・リビング・夜

照明を消した部屋で、美琴と優が映画を観ている

美琴M「今日は優と映画を観た。よくある子供向けのアニメ映画で、正直そんなに面白くなかった」

退屈そうに欠伸をする美琴

優に話しかけようと美琴だが、優が泣いていることに気付く

美琴 M 「隣を観たら優が泣いていて…ちょっとびっくりした」

泣いている優を見て、ばれないように微笑む美琴

(回想終わり)

美琴「晩御飯は小籠包を作ってみた。初めて作った割には上手にできたと思う」

優「それ、自分で言うのかよ」

優を無視して日記を読む美琴

美琴「…あと4か月ほどで優とお別れする。最近はその日が来るのが少しだけ寂し〜」

優「…」

美琴、暗い中で光るテレビと小籠包の写真を取り出して、テーブルに置く。

日記から美琴が顔を上げて、

美琴「あの時、泣いてましたよね？」

優「は？」

美琴「とぼけないで下さいよ。映画で泣いてましたよね、あの時。優も意外と可愛いとあるんだなって思ったんですから」

優「ぶっとばすぞ」

美琴、優の言葉を笑って受け流しながら日記帳に視線を戻す

美琴「3月1日、この家に住んで3カ月。ようやくレイとの暮らしにも慣れてきた。いつも不機嫌だし、最初の頃は怖かったけど、暇なときに話し相手がいるのは便利だ」

優「…暇つぶし相手かよ」

○（回想）美琴の家・リビング・夜

布団を敷いて寝ようとする美琴

椅子に座ってスマホを見ている優

美琴のスマホの電話が鳴る

着信画面には『母』の文字

優「出ないのか？」

美琴「ねえ、優」

優「優さん、な」

美琴「私、昔からドジが多かったんです。多分そのせいで、母親が結構過保護になっちゃって……。大人になった今でも『体調崩してない？』『ご飯はちゃ

んと食べてるの?』っていつも心配されてるんです」

美琴の話の話を黙って聞く優

美琴「お母さんのことは大好きなんです。だけど、今でもしつかりできてないんだ、心配かけてるんだって思うと、ちょっとだけしんどくて……」

部屋の照明が急に消える

驚く美琴

美琴「優?」

優「今日はもう寝ろよ」

美琴「……ふふっ」

少しだけ笑い、カーテンを閉める美琴

美琴M「晩御飯はブリ大根だった。ちよつと崩れちゃったけど、味が染みでて結構美味しかった」

(回想終わり)

美琴、日記帳から顔を上げる

美琴「この日、話を聞いてくれて嬉しかったです」

優「暇だったただけだ」

美琴「それでもです。ありがとうございました」

優「……早く次を読めよ」

美琴、ため息をついて日記帳に視線を戻す

美琴「12月1日」

○（回想）美琴の家・キッチン

キッチンに立って、鼻歌を歌いながらオムライス用に卵を炒める美琴

美琴M「最悪。ようやく念願の一人暮らしが始まると思ったのに」

美琴、気配を感じて振り向くと、キッチンに優が立っており、絶句する

美琴「…！」

優「へえ、オムライスじゃん」

美琴、驚いて後ろを振り返る

美琴M「まさか幽霊が住んでるなんて」

驚愕して口を抑える美琴

大笑いする優

美琴M「大家さんがお祓いしてくれたみたいだけど、成仏まで1年かかるらしい」

優「そんなに驚くなよ」

美琴M「お陰で晩御飯のオムライスを焦がしてしまった」

フライパンの上で焦げていく卵

美琴 M 「あーあ、早く成仏してくれないかな…」

(回想終わり)

美琴、日記帳をパタンと閉じて、

美琴 「本当に成仏するんですか？」

優 「オムライスの写真はないのかよ」

美琴 「失敗した料理の写真は残さないですよ」

美琴、優の方に身を乗り出す

美琴 「答えてくださいよ。本当に今日成仏するんですか？」

優、ため息をついて、

優 「するよ」

美琴 「……そっか」

美琴、乗り出した身を引く。

その後、急に立ち上がり、何でもなさそうに振舞って、

美琴 「あーあ、幽霊と一緒に生活してるの、密かな自慢だったんですけど。これ

で何の個性もなくなっちゃいます」

優 「何言ってるんだ。料理があんだろ」

美琴、驚いて優を見る

美琴「え？」

優「いつも旨そうなもの作ってたじゃねえか」

美琴「私の料理、美味しそうだと思ってたんですか？」

優に近づく美琴

優「は？」

美琴「どれが？どれが一番おいしかったです？」

美琴に気圧されてのけぞる優

優「い、言わねえよ」

美琴「良いじゃないですか。どうせ今日で最後なんだから」

優「こいつ…。言わねえって、大人しくしてろ」

優の大声に勢いを失い、椅子に座って落ち込む美琴

美琴「…やっぱり嘘だったんだ。そうですよね、どうせ私には何の取り柄もない

ですよね…」

優「お前、いい加減に…」

優、途中で言葉を止める

美琴「優？」

優「そろそろみたいだ」

美琴「……そっか」

美琴、目を伏せる

美琴「ねえ優っ…！」

美琴、顔を上げて話しかけようとするが、優の姿はもうない。

テーブルに目を移すと、机の上に並ぶ写真たちが目に入る

手に取って一枚ずつ見返す美琴

二人分の食器とローストビーフ。

暗い中で光るテレビと小籠包。

誰も映っていない椅子とブリ大根。

美琴「…っ」

美琴、泣きそうになる目を抑えてリビングから出ようとして、

美琴「……？」

優のスマホが椅子に残ってることに気付き、手に取る

美琴「……！ふふっ。」

画面を見て笑う美琴

玄関のチャイムが鳴る

美琴「！はい！！」

机にスマホを置き、美琴がリビングから出る

スマホのロック画面に、二人が出会った日の不格好なオムライスが映る

○数年後、出版社のオフィス

料理雑誌の編集者として働く美琴

デスクで作業している美琴が上司に呼び出される

上司、美琴の企画書を捲りながら、

上司「これ、前に出してくれた企画良かったよ。『女性のための、元気になる料理』次の企画、これでいこう」

美琴「本当ですか？ありがとうございます」

上司「高橋さんも大分しっかりしてきたね。この企画も期待してるよ」

美琴「…！頑張ります！」

上司に向かって、深々とお辞儀をする美琴

○美琴の家・リビング

部屋で電話をしている美琴

美琴「うん元気だよ。何とか社会人やってる。あ、そうだ。今度私の企画が雑誌に載るんだ。えーと、発売はいつだっけ…」

資料を探そうと立ち上がる美琴

拍子にテーブルの脚をぶつけてしまう

美琴「痛っ!!」

足を抑えてうずくまる美琴

美琴「あ、ううん。何でもない……。ちょっと足をぶつけただけ」

美琴、うずくまりながらも電話を続ける

美琴「大丈夫大丈夫。もう、お母さん。心配し過ぎだって。え? ご飯もちゃんと自分で作ってるよ。色々作れるようになったんだから。え、今日の晩御飯?」

美琴、ゆっくり立ち上がって、

美琴「んー。……オムライスにしようかな」

リビングを出ていく。

(了)